

	令和8年度 喜々津小学校だより 第5号 な み 喜々津 かよく んなで	令和8年 7月17日（金） 諫早市立 喜々津小学校 校長 前野 泰介 
---	---	--

あいさつは身を守る術(すべ)

「な み 喜々津」の保護者、地域の皆さん。暑い中、いかがお過ごしでしょうか。

学校では、ここ2週間“暑さ指数”とのにらめっこが続きました。文科省のガイドラインでは、指数が28を超えると外での活動を制限しなくてはなりません。昼休みに放送を入れ、遊びを中断させ教室へ戻します。そんな日々の中、学期末のまとめの授業やテスト、夏休みへ向けての生活指導など、暑さと慌ただしさとの戦いの中で終業式を迎えた次第です。5・6年生では急遽、指導員の方をお招きしメディア講話を行いました。本校の子どもたちのSNS利用におけるトラブルの中にも、場合によっては犯罪扱いになる事例もあったようで、表情を引きつらせる児童もありました。スマホは、与えた家庭の責任になります。実際、被害者が学校を飛び越えて弁護士へと依頼し裁判になったという小学校の事例もあるようです。知らずに加担した加害の記録は消えず、就職に影響するという話も…。保護者の皆さん、今回の講話は、配信を予定していますので、どうぞご覧になってください。

さて、表題の「あいさつは身を守る術」の意味を説明します。

夏休みは、子どもは学校ではなく地域で過ごすことになります。現代の子や親は、地域とのかかわりは薄いと言われます。もし、喜々津地区も同じだとしたら、近所の大人が、あまり子どもへの関心がないということになります。ともすると、不審者に声を掛けられようが連れ去られようが、大人がだれも気付かないという状態になります。

でも、近所に、あいさつを交わす大人がいれば、状況は変わります。大人は、その子に関心を持ちます。日常的にあいさつを交わす関係になれば、今度は、意識的に見守ってくださいます。その子に危険が迫っているとき、きっと気付いて何か行動してくれます。そもそも、子どもが、あいさつを交わす関係性の中で過ごしていれば、魔の手が忍び寄ることともなくなると思うのです。

さて、「な かよく み んなで」は、学校と家庭と地域とで喜々津の子どもを育てていこうとするスローガンです。ただし、夏休みは、子どもたちを家庭と地域へお返しします。

宮本 輝 氏の長編小説「流転の海」に、主人公松坂熊吾の次のようなセリフがあります。

～子どもは、この世の中で一番気にかかる他者 世間の他者よりやっかいな他者だ。だからこそ、親は、そういう子どもとぶつかり合いながらいろんな人生の機微を学ぶのだ～

我々大人は、子どもを通して、ひととして学ぶべきことを学んでいく存在です。社会は、ひととひとがかかわりあって成長していくものです。夏休みは、子どもが家や地域にいて、大変だろうと思いますが、次のようにとらえてみたらいかがでしょうか。「子どもがいるから問題が起きて困る！」ではなく、「子どもがいるからこんな経験ができていく」「子どもがいなかったらあんな体験はできないな」と。3人の娘を社会へ旅立たせた私は実際にそう思っています。

どうか、事故や事件に巻き込まれず元気に過ごし、たくましくなって2学期始業式に全員が無事に登校してくることを願います。

「な み 喜々津」の保護者、地域の皆さん。夏休み、よろしくお願いいたします。